テオドール・シュトルムと明治，大正期の作家たち

大　山　浩　太

はじめに

19世紀後半ドイツ写実主義の作家テオドール・シュトルム（1817～1888）は，その代表作『インメンゼー』（『みずうみ』，『湖畔』とも訳されている）をはじめとしてわが国でもよく知られている。彼の作品はドイツ語の教科書版として刊行されたものが数多く存在し，これまで実に34作品，92点が刊行されたという[1]。これは驚くべき数字であるが，このように多数のテクストが刊行され，使用されてきた理由として，シュトルムの作品が比較的やさしいドイツ語で書かれていること，教科書としてその作品の多くが適当な分量であることなどがあげられ，シュトルムの作品が日本の読者に与えた影響は大きいと言える。

しかし，そのシュトルムの作品が多くの学生や一般の読者に与えた影響とは別に，一人の作家・詩人として日本の作家たちにどれほどの影響を与えたのかということになると，どうであろうか。彼らはシュトルムと同じ「作品を創り出す側」，つまり同業者としてシュトルムをどう捉えていたのだろうか。本稿では日本でもなじみのあるシュトルムついて，その受容原点である明治，大正期の作家による解釈と言説を考察してみることにする。

上田敏とシュトルム

シュトルムの作品を初めて日本に紹介したのは，京都帝国大学英文科の教授だった上田敏（1874～1916）であると考えられる。1903年４月，雑誌『万年草』に発表された「水無月」という詩がそれである。詩の原題はシュトルムのJuli「７月」というものである。この詩は２年後の1905年に刊行されたヨーロッパ諸国の名詩を集めた訳詩集『海潮音』にも収められている。

ここでシュトルムのオリジナルと，上田敏の訳詩とをそれぞれ以下にあげて，

双方の内容について比較をしてみよう。

Juli
Klingt im Wind ein Wiegenlied,
Sonne warm herniedersieht,
Seine Ähren senkt das Korn,
Rote Beere schwillt am Dorn,
Schwer von Segen ist die Flur —
Junge Frau , was sinnst du nur? [2]

水無月
子守歌風に浮かびて
暖か日は照りわたり
田の麥は足穂うなだれ
茨には紅き果熟し，
小河には木の葉みちたり。
いかにおもふ，わかきをみなよ。[3]

大きく目立つのは，原詩の表題Juliは「7月」であるが，上田敏の訳詩は「水無月」となっている点である。水無月は今日「6月」のことを指すもので，ここにひと月のずれが生じることになる。これは，「太陽暦の7月をシュトルムの詩の中に表現された季節感や語感に惹かれた上田敏が，意図的に旧暦の6月を示す「水無月」と表現したものと考えるのが妥当なところである」，と平川祐弘氏は論文「西欧抒情詩の一波動　シュトルムと日本の詩人たち」[4]の中で述べているが，この見解には筆者も同感である。ここで上田敏の訳と藤原定の訳とを見比べてみたい。

七月（藤原定訳）
風のなかには　ゆりかごの歌
陽はあたたかく　地を照らし
麦はゆたかに　穂波たれ
やぶでは木の実が　あかくふくらみ
天のめぐみが地に重い
うらわかい妻よ，なにを思いしずんでいるのか？[5]

両者の日本語訳を比較した時に，明らかに内容上異なってくるのが5行目である。上田敏が「小河には木の葉みちたり」と訳しているのに対し，藤原定は「天のめぐみが地に重い」としている。問題になっている5行目のドイツ語はSchwer von Segen ist die Flurであり，仮に直訳してみると「田畑は天のめぐみで重い」となり，その限りにおいて藤原定の訳の方が原文に忠実であるといえる。原文を見たところ「小河」，「木の葉」という語にあたるドイツ語は見当たらない。ちなみに上田敏訳のこの箇所は後に訂正されており，「野面には木の葉みちたり」となったが，[6] この句にも「木の葉」という語がそのまま使われている。Segenは「祝福」の意味であり，藤原定の訳にもあるように「天のめぐみ」，すなわち豊作であることを示すものである。この5行目の上田敏の訳については度々誤訳として指摘されてきた部分である。[7] しかし上田敏が原詩の題Juliを故意に「水無月」と訳したものと考えるならば，この箇所についても単に誤訳ではなく，訳者の創作，あるいは何らかの意図的な変更と見なすのが妥当なのではないだろうか。この問題については，実際上田敏が翻訳をする際に用いた物と同一のテクスト[8] を取り寄せて検討してみたが，原文に単純な読み違いをするような箇所は見つからなかった。したがって上田敏が改訂後もあえて「木の葉」としているのは明らかに訳者の意図を表しているものであり，誤訳として片付ける訳にはいかない箇所であると思う。「木の葉」という表現を用いたり，Junge Frauを「わかきをみな」と訳すことによって，他の訳者の場合とはかなり異なった雰囲気をこの詩に与えているのは確かである。この問題については，機会を改めてさらに再考察を深めてみたい。

夏目漱石と『インメンゼー』

上田敏の訳詩集『海潮音』が刊行されたのは1905年10月のことだった。これは新体詩の歴史上の一事件だったが，当時新体詩を批判していた人物のなかに夏目漱石（1867～1916）がいた。漱石は『海潮音』が出る直前の1905年8月，雑誌「新潮」に収録された「新体詩」と題された談話のなかで次のように述べている。「…丁度ここに雑誌がある。誠にこのうちの新体詩を見給え。大抵わからない。若しわかるのであれば，即ちくだらない。」[9] 彼が引きあいに出したのは「春の夜」という新体詩であるが，漱石はこの詩をひどく酷評した後，次のように談話を締めくくっている。「…然しこんなのはよい。例へば『夢の湖』といふ小説中に挿まれた一節の詩だね。

美しき我顔ばせも
今日のみぞただ今日のみぞ
物皆は変り果てなめ
明日こそは嗚呼明日こそは。
わがものと君を思ふも
束の間ぞ嗚呼いつまでぞ
君にわかれ身はただひとり
死に果てんあはれいづこに。

同じ雑誌の中でも，是などはよほどうまいと思ふ。」[10] 漱石の言っているこの詩は，シュトルムの「竪琴ひきの少女のうた」である。

Lied des Harfenmädchens
Heute, nur heute
Bin ich so schön ;
Morgen, ach morgen
Muss alles vergehen!
Nur diese Stunde
Bist du noch mein;
Sterben, ach sterben
Soll ich allein.[11]

竪琴ひきの少女のうた（藤原定訳）

きょうだけよ　ただきょうだけよ
わたしがこんなに　うつくしいのは。
明日になったら　ああ
すっかりだめになってしまうのよ。
今だけよ　この今だけよ
あなたが　わたしのものなのは。
死んでしまうわ　わたしは死ぬのよ
ひとりぼっちで。[12]

この詩は1849年に書かれたもので，シュトルムが1851年に改訂した『インメンゼー』の中に引用されたことによって初めて世に出た作品である。したがって漱石の言う『夢の湖』[13] がシュトルムの『インメンゼー』を指していることは間違いない。シュトルムの詩が日本の作家夏目漱石の目に触れ，賞賛されていたことは大変興味深いことである。ではシュトルムの『インメンゼー』のどのような点を，漱石は評価したのだろうか。漱石は雑誌「新潮」において引きあいに出した新体詩「春の歌」について，弟子の野村伝四に宛てた手紙の中で「あれは往来を色眼ばかり使つてあるく女学生位な程度だ」[14] と述べている。漱石にとっては「春の歌」に漂う，過剰なまでの甘美な雰囲気が気に入らなかったのだと考えられる。これに対し漱石はシュトルムの作品をどう感じていたのだろうか。ここで漱石が『インメンゼー』について詳しく言及した文章を提示することは残念ながら出来ないが，彼の小説に対する好みを述べている一文をここで紹介したいと思う。

文芸評論家の小松伸六氏の「シュトルムと私」には，『インメンゼー』と話の展開上よく似ている作品として伊藤左千夫（1864～1913）の『野菊の墓』があげられている[15]。この話は『インメンゼー』と同様，回想のかたちで始まり，主人公の政夫と民子の仲が，母親によってさかれ，民子は他の男と結婚するものの，流産で死んでしまう。民子の墓の前に彼女の好きだった野菊の花が生いしげり，そこで政夫は大声でなげき泣くというものである。漱石はこの『野菊の墓』について「自然で，淡白で，可哀想で，美しくて，野趣があって結構です。あんな小説なら何百回読んでもよろしい」[16] と述べている。おそらく漱石は『インメンゼー』の素朴さや，嫌みのなさに共感したのと同時に，人間心理のひだをこまやかに汲みとるといった，シュトルムの筆さばきにも感心していたに違いない。

木下杢太郎とシュトルム

上田敏の「水無月」にせよ，漱石の「竪琴ひきの少女のうた」の場合にせよ，両者とシュトルムの作品から強烈な影響を受けたとは言い難いが，漱石が雑誌「新潮」にシュトルムについての一文を寄せた2年後の1907年には，直接シュトルムの影響を受けた詩人が登場している。木下杢太郎（本名：木田正雄 1885～1945）である。彼は独逸協会中学（現獨協大学）の頃からドイツ語を学んでおり，旧制第一高等学校で岩元禎教授のドイツ語・文学の授業から大き

な影響を受けている。なかでもゲーテの『イタリア紀行』は，杢太郎がドイツ文学に関心を寄せるきっかけとなった。そして大学への進学に際しては医学部へ入学したものの，文学に対する情熱を捨てきれず，22歳の時，中学時代の友人長田秀雄の紹介により，与謝野鉄幹の主宰する東京新詩社の同人となり，その機関誌である「明星」に自らの作品を発表するようになった。

1907年7月，杢太郎は与謝野鉄幹に連れられて九州へ旅行をしている。この旅には彼らの他に北原白秋や吉井勇，平野万里らも加わったが，この旅こそ近代日本詩史上まれに見る実り多き旅であったと言われており，杢太郎自身も後年その時の体験については度々ふれている。1918年に書かれた詩集『食後の歌』の序文において彼は九州旅行について以下のように回想している。

「…翌年予は与謝野氏，平野，吉井，北原の諸兄と九州南部を旅行して，一種古風の異国趣味（エキゾチズム）に多大の詩的感激を得ると同時に，容易く詩作する秘傳をもわが同行から偸んだのである。」[17]

伊豆に生まれた杢太郎は，幼い頃から異国情緒に対して大きなあこがれを抱いていた。そうした彼が，この九州への旅で長崎，平戸といった異国情緒ただよう土地を訪問することによって多大な刺激を受け，創作意欲が湧いてきたのは当然のことであろう。帰京した杢太郎は雑誌『明星』の10月号に4編の詩を旅の成果として発表した。そしてこれらの詩には明らかに，当時杢太郎が読んでいたシュトルムの影響が見られるのである。彼は次のように語っている。「其旅行から帰つたのちわたくし（当時大学の二年であつた）は多くの詩を作つた。テオドル・シュトオルムの好きな時分であつたから，その影響を脱することが出来なかつた。」[18]

さらに杢太郎がシュトルムの影響を大いに受けていたことを示す上記の言葉を証明する資料も残されている。杢太郎の九州旅行での体験は，紀行文，短歌，詩等様々な形で『東京二六新聞』に連載されたが[19]，その9月7日号には次のようなシュトルムの訳詩が掲載されている。

けふのみぞ，けふのみぞ
かくわれはうつくしき，
あけむひは，あけむひは
ものなべてきえゆかむ，
ひとときよ，このときよ
きみこそはわがみにしあれ。

さだめかな，しぬべしと
しぬべしと　われひとり。[20]

これは偶然にも，さきほど紹介したシュトルムの「竪琴ひきの少女のうた」であり，夏目漱石が賞賛していた詩である。杢太郎の訳は「原詩の調子を伝えて見事であり，日本語の詩としてもすぐれている」，[21] と平川祐弘氏も評価している。この詩は『インメンゼー』にも収録されていることから，数多くの翻訳があるが，とりわけ杢太郎の訳は詩全体に「無常観」が非常に強く漂っているように思われる。特に原文の最終行にあるSollの捉えかたは見事である。この助動詞を「さだめかな」と訳すことによって，全体の雰囲気がより一層無常観に満たされているのである。

では彼の言う「シュトオルムの影響を脱することが出来なかつた」とは，その作品において具体的にどのようなことなのか。平川祐弘氏の論文「西欧抒情詩の一波動　シュトルムと日本の詩人たち」には，杢太郎の作品でシュトルムの影響を受けたと見られる「残照」という詩の第一連と最終連が紹介されているので，シュトルムの作品との類似点を探り出してみることにする。

残照

（第一連）
古き街，かなしびの香の
などて，かく，今日は身に沁む。

（最終連）
一時よ，やがて真黒に
暮れゆかむ，街と思と。[22]

まず第一連の「今日（けふ）」と最終連の「一時（ひととき）よ」は共に，杢太郎訳による，「竪琴ひきの少女のうた」にもそのまま用いられている。さらにこの詩に出てくる「かなしびの」「暮れゆく」といった言葉は，シュトルムの詩の翻訳にもよく使われているものである。

ここで杢太郎とシュトルムの詩における共通点を見出すために，シュトルムの代表作を一点あげてみよう。

ヒヤシンス（藤原定訳）

遠くの方では音楽が，けれどもここはしずかな夜です。
あたりの木々が　ぼくに吐きます　まどろむようなあまい匂いを。
ぼくはいつも思いつづけてきた　君のことを。
ぼくは眠りたい，だのに君は踊らずにはいられないのだ。

踊りくるって　やすむひまなく
ともしびが燃え　ヴァイオリンがかん高く，
おどりの輪は　とじたりひらいたり
みんな顔をほてらせているのに　君ばかりがあおい顔して

どうしても踊らずにはいられない。男の腕が
君の胸にまきついている　ああ，ひどい目にあいませんよう！
見えてくる　君のしなやかでやさしいからだが
白い服きて　飛びすぎてゆく。

するといっそう　夜のかおりがあまやかに
夢みるように　木々の花からわき出てただよう。
ぼくはいつもおもいつづけてきた　君のことを。
ぼくは眠りたい，だのに君は踊らずにはいられないのだ。[23]

シュトルムの詩には上にあげた「ヒヤシンス」や「夕ぐれ」，あるいは「たそがれの時」といった，夕暮れ時をテーマにしたものが非常に多い。同様に杢太郎の詩にも「夕暮れ」「夕日」「夕焼け」「夕空」等の言葉が数多く用いられており，シュトルムのように黄昏時の情景を歌った作品が多数存在する。こうしたことからも，杢太郎がシュトルムから少なからず影響を受けたことは間違いない。確かに彼はリーリエンクローンや，後にホフマンスタールといった詩人らの作品も愛し，その影響を多分に受けたと考えられるが，杢太郎が詩人としての初期の頃にとりわけ手本にし，杢太郎に作詩の秘訣を教授した人物がシュトルムであったことは，見過ごすことの出来ないことである。

結び

我が国においてシュトルムの作品は最初に述べたようにドイツ語の教科書として広く読まれている。だがそれらを文学作品としては軽視する傾向があることも否定出来ない。小松伸六氏は「シュトルムと私」の中で「…クラス主任であった麻生先生に『何を読んだらいいでしょうか』とたずねたところ，先生は『ドイツ文学ならシュトルムあたりから読んでみなさい』と言われた。私は内心不服であった。というのは東京の師範付属中学からきた学生が，『みずうみ』なんて甘い小説だ，サッカリンみたいなものさ，と言っていたのをきいていたからである。」[24] と記している。確かにシュトルムについて語られる際には，必ずといってよいほど「やさしい」「あたたかい」「純粋」「牧歌的」「抒情的」といった表現が用いられる。しかし今回見てきたシュトルムの訳詩を見る限り，必ずしも上にあげた言葉によってのみシュトルムの作品を表現出来る訳ではなさそうである。上田敏が訳した「水無月」においては，「木の葉」といった語を挿入することによって「死」のモティーフが見事に引き出されているとは言えないであろうか。同様に杢太郎もまた，「竪琴ひきの少女の歌」から，「無常観」や「死」といった深刻なテーマを引き出している。日本では一般的に，シュトルム＝牧歌的，あるいは抒情的と捉えられる場合が多いが，上田敏や木下杢太郎はシュトルムの作品から，通常日本の読者があまり意識することのない暗い深遠の雰囲気も読み取っていたものと思われる。また夏目漱石にしてもシュトルムを賞賛したのは，『インメンゼー』が単にロマンティックなムードに満ちていたからではなく，奥深い文学表現を含んでいると考えていたからではないだろうか。シュトルムにこれまでとは別の角度から光を当ててみることによって，彼の全く異なった姿が映し出されることも考えられよう。その意味において，シュトルムが初めて日本に紹介されてから100年以上がたち，その作品の翻訳が多数存在する今日，シュトルム受容の原点ともいえる明治，大正期の日本の作家たちによる翻訳や言説をもとにシュトルムを再考察してみることは，無意味なことではないだろう。

【注】

1 小畠泰「ドイツ語教材としてのシュトルム作品」[日本シュトルム協会編『シュトルム文学新論集』鳥影社 2003年 S.327～337.]
2 Storm,Theodor: *Theodor Storm Gedichte* Frankfurt am Mein, 1983. S.49.
3 『定本上田敏全集』第1巻 教育出版センター 1978年 S.106.
4 平川祐弘「西欧抒情詩の一波動 シュトルムと日本の詩人たち」[国文学 解釈と鑑賞 1968年7月]
5 藤原定訳『シュトルム詩集』 白風社 1975年 S.84.
6 上田敏『海潮音・牧羊神』角川書店 昭和27年 S.46.
7 田中宏幸「日本におけるシュトルム文学の受容 没後百年を記念して」北陸学院短期大学「紀要」第20号 1988年 S.160.
8 hrsg.von Jacobowski,Ludwig: *Neue Lieder der besten neueren Dichter fürś Volk*, Berlin, 1899. S.116.
9 『漱石全集』第18巻 漱石全集刊行會 昭和12年 S.551.
10 ebd.S.553.
11 関口存男編『湖畔』三修社 1956年 S.16.
12 藤原定訳『シュトルム詩集』白風社 1975年 S.25.
13 漱石が目にした翻訳は 三浦白水『夢の湖』であったと考えられる。[『神泉第1号』神泉社 1905年]
14 平川祐弘「西欧抒情詩の一波動 シュトルムと日本の詩人たち」[国文学 解釈と鑑賞 1968年7月号 S.17～18.]
15 小松伸六「シュトルムと私」[石丸静雄訳『みずうみ・三色すみれ』旺文社 1966年 S.175～176.]
16 ebd.S.176.
17 『木下杢太郎全集』第1巻 岩波書店 1981年 S.17.
18 『木下杢太郎全集』第13巻 岩波書店 1981年 S.22.
19 『木下杢太郎全集』第18巻 岩波書店 1981年 S.6.
20 復刻版『東京二六新聞：明治40年9月7日号』 不二出版 1995年
21 平川祐弘「西欧抒情詩の一波動 シュトルムと日本の詩人たち」[国文学 解釈と鑑賞 1968年7月号 S.20.]
22 ebd.S.21.
23 藤原定訳『シュトルム詩集』白風社 1975年 S.33.
24 小松伸六「シュトルムと私」[石丸静雄訳『みずうみ・三色すみれ』旺文社 1966年 S.174.]

【参考文献】

○　日本シュトルム協会編『シュトルム文学論集』三修社　1989年
○　日本シュトルム協会『シュトルム文学研究』東洋出版　1993年
○　宮内芳明『シュトルム研究』郁文堂　1993年
○　日本シュトルム協会編『シュトルム文学新論集』鳥影社　2003年
○　福田・剣持・小玉編『欧米作家と日本近代文学・第４巻ドイツ編』教育出版センター　1975年
○　田中宏幸「日本におけるシュトルム文学の受容　没後百年を記念して」北陸学院短期大学「紀要」第20号　1988年
○　平川祐弘「西欧抒情詩の一波動　シュトルムと日本の詩人たち」国文学　解釈と鑑賞　1968年７月号
○　Takahashli,Kenji : Theodor Storm und Japan. In:Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft 17. 1967,S. 55～57.
○　Storm,Theodor : *Theodor Storm Gedichte* Frankfurt am Mein,1983
○　hrsg.von Jacobowski,Ludwig : *Neue Lieder der besten neueren Dichter fürs Volk*,Berlin,1899